シャコンヌ

根室市外三郡医師会
町立別海病院
山内（やまうち）　修（おさむ）

Ｊ・Ｓ・バッハ（ヨハンゼバスティアン）の有名なヴァイオリン曲です。

シャコンヌは一般に1600年前後から欧羅巴（ヨーロッパ）で流行した３拍子の舞曲で、その名を冠した曲は当時リュリやパーセルなど多くの作曲家が作っています。

①シャコンヌのピアノ編曲：ブゾーニ編

バッハのシャコンヌのピアノへの編曲はブラームスを含め多々ありますが、これはＦ・ブゾーニ（フェルッチョ）が1897年ころに発表したものです。彼自身が類いまれな技巧の持ち主とのことで、シャコンヌの旋律以外にも加筆し音符が散りばめられています[1)]。ここで問題なのは最後から４小節目前の左手の**ソ**の音です。演奏の流れでいくと「この**ソ**は１オクターブ下の**ソ**になるべき？」、との指摘が以前からあったようです[1)]。しかし、普通の88鍵盤のピアノではオクターブ下の**ソ**の鍵盤がないのです。

1900年ころに初代ベーゼンドルファー・インペリアルが、ブゾーニの依頼で作られました。ここで皆さん、そのインペリアル（Model 290）をネットなどでご確認ください。88鍵盤の左にさらに黒く塗られた鍵盤が９鍵付いています。このピアノですとオクターブ下の**ソ**の音を出せます。YouTubeでブゾーニ自身の実演（ピアノロールより再録）を聴くと、その低い**ソ**の音（キー）がはっきりと聴こえます。

ちなみに、Ｋ・ジャレットが超名盤「ザ・ケルン・コンサート」（1975）で弾いたピアノもベーゼンのインペリアルです[2)]。その「ザ・ケルン～」を再演するCDを、クラシック畑の山口ちなみが2025年12月に発表しました。音が非常に良く、私は半世紀前の自分を探しつつ聴き惚（ほ）れています。使用楽器はインペリアルではなくModel 275とのこと[2)]。

②映画：無伴奏「シャコンヌ」（1994）

25年以上前のNHK-BSでの放送を録画して観ていました。友人の自殺により衝撃を受け苦しんだ主人公が、自分の音をひたすら探し続ける物語です。シャコンヌの演奏断片が何回も出てきます。最後は地下水道の中を漕ぎ手１人の小舟の上で、主人公がシャコンヌを弾いていく‥‥心に残る映像です。音楽監修と演奏は名手Ｇ・クレーメル（ギドン）が担当。

この映画に感銘を受ける人は多いと思われますが、現在においてはVSHテープのみです。今後は鮮明なBD（ブルーレイ）化やNetflix配信などを望んでいます。

〈参考〉

１）浅葉なつ著「桜の音がきこえる あるピアニストが残したパルテイータ第二番ニ短調シャコンヌ」
２）ジャズライフ社「Jazz Life 2026年１月号」

地域の医療

留萌医師会
初山別診療所
髙橋（たかはし）　誠（まこと）

初山別村の診療に関わり１年が過ぎました。医師となり30年、地域医療に関心を持ち、自治医大で学び、出身の高知県での10年間と、その後の北海道での20年間が経過しました。中核病院、診療所、離島で勤務する中で当然ではありますが、さまざまな地域の医療の形と出会うことになりました。

まだ無医地区という言葉が残り、限られた地域での人材、資源を最大限に生かし対応する中、包括的に、協力的に、献身的な医療体制で支えている状況がありました。コンビニのように、いつでも気軽に相談、対応できる状況がやや当たり前でもありました。

30年の中で大きく印象に残ることは、診断にMRIが大きく関与し、コメディカルがエコーへ主体的に関わるようになり、高血圧、糖尿病などの生活習慣病、喘息、関節リウマチ、各種がん治療の治療方針、治療内容の変化を強く実感します。介護保険、研修医制度による地域の医療の影響を体感します。運営（経営）の問題、看護師不足、介護職不足など地域を支える医療機関としての存在も危惧するような状況にも直面しました。

学術的な地域の理想像、総合診療の医療の仕組みの理想を☆５と見立てて、目指すべき改善＆工夫は必要だと実感します。しかし、都会と比べ、地方での人口や経済の状況、その地域で暮らす人々の文化や様式、さらに個人や家族の価値観が存在し、全体としては☆２の医療福祉介護の状況にとどまっているのも現状です。現場では、☆２から急に☆４や☆５に外部から勧める変化は、意外にうまく進まず、やはり地域から生まれる☆２から☆2.5に変えようとする自発的な変化が必要だと、診療の中で感じる場面が多くあったように思います。

高齢化、人口減少、健康観や死生観の変化、情報過多、AIの普及など取り巻く環境が多様に加速的に変化する中、その状況に応じ少しでも応援できるような存在でありたいと願っています。